

## 大学の中で育つ子どもたちと保育士

増田真理子

### はじめの一步

桜の花満開の四月上旬、私は大学の南門の横に静かにたたずむ、いずみナーサリーの門をくぐりました。幼稚園の保育経験と年齢を重ねていますが、ナーサリーのフリー保育士としては、新人一年生。〇歳から二歳の子どもたちとの初めての出会いに緊張しながら保育室に入りました。広い保育室では、

小さな子どもたちが六人遊んでいましたが、一歳二か月の女兒Pちゃんが私の顔を見てウエーンと泣きだしました。Pちゃんにとっては、見たことのない大人が急に入ってきたのですから当然の反応でしょう。私は不安を与えないように、なるべく静かに子どもたちを見守っていました。

三日目、初めて午前中の散歩に付き添いました。一歳児四人、二歳児二人の子どもたちとわくわくし

ながら出かけました。大学内の広場は、子どもたちにとつては、安全な遊び場であるのに、足元がしっかりとっていない一歳児の赤ちゃんがすぐ転んだり、一人で階段を上がったり降りたりしているのを見て、慣れない私は「あつ危ない！」と何度も心の中で叫んでしまいました。そんな時も若い先生は、ここに子どもたちの動きを見守り、危ない時にはすばやく子どものそばに行つて、そつと手を添えています。

四日目、お昼寝のあと、仲良しの友達がいなくて手持ちぶさたなのか、二歳六か月のSくんがまわりの様子をうかがっているのが気になりました。私は近くに行つて、一緒にブロックで汽車を作ろうと働きかけると、Sくんは「このおもちゃは、Tさんの！」と言つて使わせてくれませんでした。Tさん

は、大好きな先生のことです。慎重派のSくんにとつて、私はまだT先生の代わりになるのは、十年早かつた？ ようです。

そんな子どもたちの素直な反応を受け止め、これから本気で付き合つていこうと気持ちを新たにしました。幸い、私がナーサリーの生活に慣れるよりずつと早く、子どもたち一人ひとりが私を受け入れてくれました。

#### ナーサリーの一日

ナーサリーの特徴は、〇歳から二歳までの子どもが十数名という小規模で家庭的な雰囲気だと思えます。安全のために、オートロックのある玄関は、普通の家屋のたたずまいをしていて、二年前に引越した当初は、子どもたちが「ここ誰のおうち？」「おじゃまします」と言つて入ってきたというエピソード

ソードがあるくらいです。

ナーサリーの一日は、子どもの登所から始まりま  
す。

「おはようございます！」という親子の明るい声が  
玄関に響くと、お母さんの支度を待てずに子どもた  
ちが「いつてきます！」と保育室に直行します。

抱っこの赤ちゃんは、お母さんから保育士にバト  
ンタッチです。

「今日は何して遊ぼうかな?」「お友達、もう来て  
るかな?」。子どもたちの顔は、とても晴れやかで  
す。

でも、入園初日の子どもは、これから自分が飛び  
込む未知の世界への不安のためか、お母さんと離れ  
る時に「ウエーン」と泣きだします。

「そうだね。お母さんと離れるの寂しいよね」。保  
育士は子どもの気持ちを受け止め、そばに寄り添

い、ゆつくりとナーサリーの生活に慣れていくのを  
見守っています。

十時、今日のメンバーがそろうのを待って、みん  
なでお散歩に出かけます。ナーサリーは大学の敷地  
内にあるので、行き先は、近くの公園や大学構内の  
中庭や広場です。大学の守衛さんとも顔見知りで、  
お散歩の時はあいさつをして通ります。図書館前の  
小さな池にはコイやカメもいるし、カキやビワの木  
には、毎年たくさんの実がなつて子どもたちを楽し  
ませてくれます。秋になると、大学の象徴である、  
イチヨウの木が黄金色に変わり、ハラハラと落ちた  
葉っぱの小山の中に入って、子どもたちは「おふろ  
だね」と楽しそうに自然を満喫しています。



十一時、そろそろおなかのすいた〇、一歳児のほしぐみがひと足早くナーサリーに戻り、お母さんの用意してくれたお弁当を食べます。手やフォークを使つて頑張つて一人で食べるのが大好きです。

少し遅れて、一、二歳児のにじぐみも帰つてお弁当です。先生と散歩の話で盛り上がつてにぎやかです。

「みんなで食べると、おいしいね」。

十二時、おなかがいっぱいになったほしぐみは、和室でお昼寝です。四月は、食べている時に眠くなつて泣きだした〇くんも、だんだん泣かなくなりました。

にじぐみは、保育室でお昼寝です。眠くなくても、先生が優しく背中をトントンとたたいてくれると自然に眠くなります。

三時、お昼寝をいっばいしてスッキリした顔の子

も、まだ眠い子もみんなで大きなテーブルを囲んでおやつを食べます。ナーサリーのおやつは、大学の学生ボランティアさんの協力で手作りおやつになりました。

「今日のおやつは何かな？」子どもたちは、学生ボランティアさんや保育士が作ってくれるおやつを楽しみにしています。

その後、お母さんが迎えに来ってくれるまで、保育室を中心に、みんなでゆつたりと遊びます。

「Aちゃん、お迎えですよ！」と声をかけられて、お母さんの所にかけていく子どもたちのうれしそうな顔を見ると、「やつぱりお母さんが一番なのね」と思いながら、今日も無事に終わったことに感謝しています。小さな子どもたちが、それぞれの家庭を離れて過ごすナーサリーの一日が、安全で快適なものであるように、保育士一人ひとりが心を配り、

チームワークで取り組んでいきたいと思っています。  
す。

### 赤ちゃんの遊びの中にみる社会性

子どもたちと生活をしていると、たくさんのおまは  
笑ましい場面に出会います。ほしぐみのお昼寝に付  
き添う時、生まれて一年しか経っていない子どもた  
ちが、お母さんと離れても、友達と安心しきつて  
眠っている姿に触れると、とても安らかな気持ちに  
なります。

私は、子どもが寝返りしたり、むずがって泣いた  
とき、すぐ寝かしつけてあげられるように子どもた  
ちをそばで見守っています。

最初に目を覚ましたBちゃんは、そばにいる私の  
顔を見てにっこりほほ笑みました。まだ、眠たいか  
なと思いい「ごころごころ」「ねんね」と声をかけて体を

さすると、しばらくじっとしていました。Bちゃん  
が、起き上がってきたあと、まわりで眠っている友  
達を興味深そうに見ているので、「Cちゃんも、D  
くんもまだねんねしてるね」と話しかけると、うな  
ずきながら、そばに行つてのぞき込んでいました。

小さいながらも友達に気持ちに向けている姿に、家  
庭ではできない経験がBちゃんを育てていることを  
感じます。おむつをかえてもらおうとBちゃんは、お  
もちゃの棚に直行し、先生の作ったおもちゃで遊び  
始めました。Bちゃんは、一人で遊んでいるより  
も、友達が起きてきたほうが楽しそうです。

みんなの大好きな遊びは、「いないいないばあ」  
です。和室の扉とおもちゃの棚の間にできた、小さ  
いすき間に入っていくのを見て、「あれ、Bちゃん  
がないないよ!」とほかの子に話しかけると、得意そ  
うな顔で出てくるのです。そんな時、「いないいな

「いー」と声をかけると、うれしそうに「ばあー」と言つて出てきては、また、すき間に戻り、いないないばあの遊びが繰り返されます。

当然のことですが、このすき間に入りたいた子がほかにもでてきます。一人しか入れない所に、もう一人が無理やり入つて行こうとすると、中から抗議の泣き声が聞こえてきます。「Dくん、今、Bちゃんがいるから順番ね!」と言つても後ろに下がりません。仕方なく、入り口をふさいでいるDくんをひっぱり出し、Bちゃんが出てくるまで一緒に待っています。カーテンの中での「いないないばあ」は、何人かが入ることができて人気です。

おもちゃの取り合いも頻繁に起こります。取られそうな子は、声を出して「いやだ」という意思表示をしますが、そのおもちゃが欲しい子は、あきらめません。

「Dくん、ここにも同じのがあるよ」と声をかけても、友達の持つているおもちゃが欲しいのです。保育士が「貸して」と言つてもだめならば、「後でね」と言つてほかのおもちゃで遊ぶように働きかけます。

集団で遊んでいる時、子どもたちは、友達の存在を認め合い、遊びの中で我慢や共感ということを学んでいっています。ほしぐみのお昼寝明けの時間のように、守られた空間の中に同じ月齢の子どもたちが遊ぶというのは、たとえば鏡の中にいるような感じで、家庭で親と向かい合っている状況では見えないう、自分と似た存在の友達を見ることができないのではないでしょうか。そして、ナーサリーでの日常における集団生活の中で、赤ちゃんの社会性が少しずつ育っていることを実感しています。

(お茶の水女子大学附属いずみナーサリー)